

思 い 出

趙 小 鳳

(平成2年度修了生・埼玉県草加市在住)

今年の八月五日に近代文学ゼミは信濃追分の油屋で相馬正一先生の退官記念会を催し、会場で相馬先生に二年ぶりにお目にかかった。記念会で在校生、各期の修了生、卒業生は一堂に会し、先生に教わった事、ゼミで過ごした楽しい日々の事を話したりして、会場は和やかな雰囲気満ちていた。この雰囲気から、先生はいかに尊敬されているかが窺える。皆さんと同じ経験をした私は皆さん以上に先生のお世話になり、ご指導を受け、二年間の思い出はたくさんあった。

油屋は昔から文学者がよく訪れる旅館である。そのため、こゝは近代文学ゼミの軽井沢文学散歩の宿泊旅館になった。私が出来た年の秋に初めて軽井沢文学散歩に参加させて頂いた。油屋は、今度は三度目である。外は雨が降り続け、涼しい避暑地はさらに温度が下がり、夜になると少し肌寒い感じもする。窓から雨に濡れた樹木を眺め、思いが五年前に戻っていく。

一九八九年八月に私は研究生として上越教育大学国語研究科に入學し、「文学特論」の授業を聴講し、その講義が大変面白かったため、文学を勉強しようとして心に決めたのである。その後、試験を受け、翌年大学院に入り近代文学ゼミのメンバーとなった。指導教官は相馬正一先生である。日本の大学院で勉強でき

ることは非常に嬉しいことであるが、いろいろな不安もあった。最初に出会った難題は研究題目を決めることである。あれこれと考えたが決められず、結局、先生の研究室のドアをノックした。先生は、外国の学生にとって、日本的なものがないと思います、と言われ、しばらくして、川端康成はどうですか。川端は日本の代表的な作家で、ノーベル文学賞の受賞者でもあります。受賞作品『雪国』の舞台はこの新潟県の湯沢という所です。と話してくださいました。先生のお話しをきっかけに、川端文学に挑戦してみようと思つて研究題目を「川端康成研究」に決め、後、『雪国』を中心に勉強し始めた。しかし、文学の研究は私にとつて、そう簡単なものではない。文学に対する考え方や扱いは国によつて異なってくる。先生の講義を受け、ゼミの討論に参加することによつて、考え方の相違に気付き、自然な考え、客観的な見方の意味が少しずつ分かってきて、イデオロギーに影響された思考方式から抜け出そうとしていた。先生は私の事をよく理解して下さい、日本も過去に同じような時代がありました。あなたがむしろ二通りの考えのぶつかる所から作品を分析してみ、何が分かってくるだろうと話して下さい。私は先生のお話しを聞いて、自信が湧いてきた。二年間、

ご指導のお蔭で、新しいものを多く勉強できた。授業やゼミで先生の文学作品に関する分析及び評論から得た感動も多かった。このような環境と雰囲気の中で、従来の観念的な見方、考え方が少しずつ客観的、自然的な方に変わりつつあることを、今になって初めて気付いた。

また、私はほかにも勉強のチャンスも多く頂いた。ある時、先生は中国映画のビデオを見せて下さった。それは中国若手監督の新作で、「赤い高粱」という映画で、海外でも好評されている作品である。中日戦争を内容とする映画は、昔政治的色彩を帯びたものが多かった。しかし、この作品が意外に従来の枠を超え、人間という角度から描かれて、斬新な感じを与えてくれた。その後、私が書いたこの映画についての感想は先生のご紹介で、「新潟日報」に載せた。その他、太宰治の作品を翻訳するチャンスも頂いた。太宰治には「竹青」という作品がある。この作品は中国の古典怪談「聊齋志異」によって翻案されたもので、面白い作品である。私は適切に翻訳できるかどうか心配だったが、勉強に良い機会だと思つて、喜んで引き受けた。先生は、当時太宰治が参照した日本語版の「聊齋志異」と同じ本を提供して下さいました。貴重な資料に頼つて、「竹青」の翻訳を試みた。後、翻訳文は学会誌に載せ、先生は翻訳文の為に、特別に文章を書いて下さった。

勉強以外の思い出も少なくなかった。冬になると、ゼミは時々スキーに出掛ける。先生はスキーが大変お上手であった。初めて先生がスキーをするのを見た時、自分の目を信じない程驚いた。内陸で育つた私はスキーどころか、何メートルも積も

る雪を見るのも初めてであった。先生は中国ではスキーというスポーツがあまり知られていないことを聞いて、スキーに関する道具の名称を一々説明し、使い方、滑り方などを同行の院生に全部カメラで撮影させ、帰ったら中国の学生に教えて下さいと、テープを下さった。私はスキーを通して、貴重な日本語教育資料も得たのである。

ゼミには一つ欠かせないことがある。それが文学旅行である。二年間、文学旅行は十数回もあった。新潟県内は言うまでもなく、県外は西へは兵庫まで、北へは青森までである。一番よく行ったのは軽井沢である。私達は堀辰雄の旧居と歯痛地藏の前で先生から堀辰雄の文学を聞き、幸福の谷で川端康成の別荘を探し回る。北原白秋の詩碑で、先生が『落葉松』を吟誦するの聞き、有島武郎の終焉の地で、先生の文学者の死についての話しに耳を傾ける。帰りに小諸に寄り、懐古園で島崎藤村の生涯の展示を観覧した後、信州の手打ちそばを賞味する。いつも充実する旅であった。

文学旅行を通して、文学の勉強ができると同時に、色々な楽しいこともあった。日本の古都京都是歴史的に有名な都市で、この点では、私が住んでいる西安に似ている。日本にいる間、一度行けるならと思つていた。ちょうど、大学院一年の時に幸運で京都へのゼミ旅行が計画された。京都で同期の三人が先生と一緒に京都の代表的な名所を訪れた。それぞれの名所で、先生は、その名所が歴史とのつながり、又は文学とのつながりを意味深長に話して下さいました。平安神宮、念仏寺、広隆寺、祇王寺、滝口寺などを見て、最後に八坂神社に行く。夕暮れの八坂

神社は静まり返って人氣も少なかった。三人は先生から神社の敷地の中と与謝野晶子の歌碑があると聞いて、さっそく探し始めた。やがて、ある芝生の所でその歌碑を見付けた。記念の為みんな写真撮ろうと、私はシャッターを押した。翌日、あの有名な金閣寺を見に行った。私は金閣寺の素晴らしさにすっかり感動してしまった。百聞は一見に如かず。二日間の旅行が終わり、京都を見た興奮をすべてカメラに収めて戻って来た。期待していたフィルムを現像して見たら、なんと全部空白であった。実はそれが私の操作ミスで、フィルムが回らなかったのである。本当に残念だったが、京都の「幻」の写真の事はその後もときどき話題になって笑われた。

しかし、相馬先生との旅行の中で、最も距離の長い旅は一九九〇年夏休みの東北旅行である。今度の旅行は同ゼミの宮崎潤一さんの車で移動したのである。まず、新潟から秋田まで行って、秋田で先輩の高橋秀晴さんに案内して貰い、男鹿半島を回って見た。秋田の海は非常に綺麗で、景色も美しく、中国の山水画を連想させるぐらいである。その後、秋田を北上して、先生の故郷青森に入った。青森に来る目的の一つは、ねぶた祭りを見るためである。この祭りの話しは先生からよく聞いたが、どういふものかは想像が付かなかった。祭りの日に、弘前にいる同期の方が前以て取ってくれた道端の見晴らしのいい場所に座り込んで、盛大な祭りの行列を迎えた。色々な形をした色とりどりなねぶたが次から次へと登場してきた。直径何メートルもある太鼓の上に乗って太鼓を叩く若い女性の逞しい姿も印象的であった。ねぶたに描かれている絵の内容は殆ど中国古典の

『三國志』からだという先生の説明で分かった。ねぶたはこんなに迫力があるとは思わなかった。太鼓の音が人を興奮させ、その響きが何日間も心の奥に残っていたのである。日本の本格的な祭りを見、その雰囲気を実感するのは初めてである。日本民族の風習に対する認識が一瞬深まったような気がする。先生との旅行は文学が課題である。青森は太宰治の世界である。青森で最初に泊まった所は斜陽館である。太宰治の作品によく描かれるその邸宅を見るのも夢であった。斜陽館で先生が故郷津軽の言葉で女将さんと太宰及びこの家の事を話しているのを夢中で聞いていた。津軽半島で太宰関係の場所を見て南へ下る途中、立派に成長している檜を見て、先生は、ヒノキ科に「あすなる」という木があります。何故「あすなる」というのかを知っていますか。実は、この木は自分より立派な檜を羨ましがって、明日は檜になろうという意味だと教えて下さった。なかなか面白い話で今も記憶に新しい。その後、岩手県で石川啄木、宮沢賢治を、群馬で萩原朔太郎を記念する名所も見た。最後、日光にも寄り、東照宮で日本人馴染みの眠り猫と三猿まで見て旅行を終わった。東北旅行は十日間かかり、走行距離二〇〇〇キロ、八県を経由した。旅を通して、日本の文学、自然及び民俗などにおいて大変勉強になり、視野が広がった。日本でこんな素晴らしい旅は二度とないだろうと思う。

二年間、上越教育大学で相馬先生に教わったことを生かし、これらの素晴らしい思い出を人生の励ましとして大切にしていきたいと思う。ここで、先生への感謝の気持ちを表し、また先生のご健勝及び今後のご活躍を心よりお祈りしたい。